



言葉と心と コミュニケーション

東北大学大学院情報科学研究科教授
邑本俊亮 (むらもと としあき)

あなたは、友だちの何気ない一言に傷ついたことはありませんか。何気ない一言で、とても勇気づけられたことはありませんか。言葉はとても不思議です。同じ言葉でも話す人や場面によって伝わる内容が違ったりします。私たちは言葉をどのように理解しているのでしょうか。

子どもたちにコミュニケーションを伝える

私は、日本学術振興会の「ひらめき☆ときめきサイエンス」という事業で、平成21年度より子どもたちを対象とした学術イベントプログラムを開催しています。子どもたちを大学に呼んで、1日コースで言葉やコミュニケーションに関する心理学体験をしてもらうというものです。プログラムの概要は以下のとおりです。

目的 人間が言語を理解する際の心の働きを知り、コミュニケーションの「むずかしさ」と「楽しさ」を実感することが目的です。

講義 言語の曖昧さ・不十分さと、言語理解時の心理機構について、多くの具体例やデモンストレーションから学習します（詳細は後述）。

ランチタイム 4～5人のグループに分かれて、各グループに1人ずつ心理学専攻の大学生・大学院生が入り、参加者と対話しながら学食でランチタイムを過ごします。



実習 小学5・6年生対象のコースでは、コミュニケーション・ワークショップの専門家を外務講師として招き、受け手の態度によって話している時の気持ちがどのように変わるのかを試す実習や、言葉を使わない状況で「伝える力」と「受け入れる力」を体験する実習を行います。中学生や高校生対象のコースでは、パソコンを利用した言語認知に関する心理学実験を体験します。具体的には、プライミング効果に関する実験を行い、参加者全員のデータを集計してプライミング効果を確認します。

まとめ 現代のネット社会を視野に入れつつ、人間どうしのコミュニケーションで大切なことや気をつけなければいけないことなどを考えます。そして、人間の言葉を輝かせているのは、相手との信頼関係や絆であることを、あるメールのメッセージの例をもとに学びます。

講義内容

では、以下に講義内容を紹介します。

①言葉の性質

私たち人間にとって、言葉はなくてはならないものです。言葉を見たり聞いたりしない日はないでしょうし、言葉をいっさい使わない生活なんて、とても考えられません。しかし、言葉は、決して万能なコミュニケーション・ツールではありません。



Profile — 邑本俊亮

1984年、北海道大学文学部行動科学科卒業。1992年、北海道大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。北海道大学文学部助手、北海道教育大学講師、助教授、東北大学大学院情報科学研究科助教授、准教授を経て、2011年から現職。博士（行動科学）。平成17年度東北大学総長教育賞・東北大学全学教育貢献賞受賞。専門は認知心理学。主な著書は、『文章理解についての認知心理学的研究』（単著、風間書房）、『心理学の世界 基礎編3：認知心理学』（共著、培風館）など。

第1に、言葉はとても曖昧です。同じ表現で意味が複数存在するものがたくさんあります。たとえば「こい」。いくつ意味があるか考えてみましょう。いくつ思いついたでしょうか。単語だけではありません。文や文章にも、複数の意味にとれるものがたくさんあります。「太郎が次郎と三郎を励ました」。さて、励ましたのは誰で、励まされたのは誰でしょうか。

第2に、言葉は言いたいことを伝えるには必ずしも十分だとはいえません。「何と言っているのかわからない」「うまく言葉にならない」という経験は皆さんにもあるでしょう。自分の気持ちを言葉で正確に表現することはとてもむずかしいことなのです。気持ちのほかにも、絵や技能なども、言葉にするのがむずかしい場合がありますね。

第3に、言葉はとても気まぐれです。たとえば、みなさんはときどき「ヤバイ」という言葉を使うのではないのでしょうか。しかしそれを、どんな意味で使っていますか。「良い」という意味でしょうか、「悪い」という意味でしょうか。そう、どちらにでも使えるのです。そのときどきで意味が変わる、そんな気まぐれな一面を持っているのも、私たち人間が使っている言葉の特徴です。

②言葉を理解する心の働き

曖昧で、不十分で、気まぐれな言葉。それにもかかわらず、言葉でコミュニケーションが図れるのは、私たちが言葉を受け止めるときに、自分の「心」を働かせて理解しているからなのです。では、いったいどんな心の働きがあるのでしょうか。

前後関係から理解する 会話には流れがあります。言葉はその流れ、つまり前後関係の中で

理解されます。この前後関係のことを文脈といいます。文脈があるからこそ、曖昧な言葉の意味が一つに決まることがとても多いのです。

知識を使って理解する 私たち人間は、頭の中にたくさんの知識をもっています。知識は、言葉を理解するときに重要な役割を果たします。「おなかがすいたのでコンビニに行く」と言われたら、その人が「食べ物を買おうとしている」ことがすぐに理解できますよね。自分の知識を使って、実際には言われていないことを推測して理解しているのです。

場面の中で理解する 言葉は、場面によって意味が違ってくることがあります。ですから、その言葉が使われている場面をよく見ておくことが重要です。たとえば、「君は天才だね」と言われたとしても、あなたが大失敗をした後だったら、それは文字通りにはとれません。「いやみ」として理解しなければなりません。

言葉以外のメッセージを頼りに理解する 人間どうしのコミュニケーションで交わされるメッセージは言葉ではありません。動作やしぐさ、表情なども、相手の気持ちを理解するうえでとても重要です。このような言葉以外のメッセージから、言葉では伝わらない気持ちを理解することも多いですよ。

相手のことを考えて理解する 「どう?」「うん、大丈夫」。こんな会話が成り立つのは、お互いが共通の知識をもっていて、それを前提として発言しているからです。このような知識のことを「共通基盤」と呼びます。相手との共通基盤が不足しているとコミュニケーションが取れないこともあります。お互いに相手のことを知っていること、相手をわかっているということが、コミュニケーションの基本なのです。